
研究ノート

ハンス・フォン・ビューローのイギリス演奏旅行

最上英明
太田眞理

1. ハンス・フォン・ビューローへの再評価

ハンス・フォン・ビューロー (1830~1894) は今年 2014 年、没後 120 年を迎える。ビューローはリストの娘コジマと結婚したものの、妻を師のワーグナーに奪われた気の毒な音楽家として知られるが、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 [以下、ベルリン・フィルと略記] の初代首席指揮者に就任し、名門オーケストラとしての名声を確立する基礎を築き、アルトゥール・ニキシュ、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、ヘルベルト・フォン・カラヤンと連なるベルリン・フィルの歴代名指揮者の系譜の筆頭としても有名である。そのビューローを卓越した音楽家として再評価する動きが、今から 20 年前、没後 100 年を迎えた 1994 年から高まってきた。

ビューローは 1880 年秋からマイニンゲン宮廷楽団の楽長を務め、1882 年 1 月の同楽団のベルリン公演での大センセーションが、その年 5 月のベルリン・フィル創設の起爆剤になった。そのマイニンゲンで、1994 年にビューローに捧げる音楽祭が開催された。1991 年から始まったベルリン・フィルのヨーロッパ・コンサート (毎年創立記念日の 5 月 1 日にヨーロッパ各地の歴史的な文化都市で開催) も、この年はマイニンゲンの劇場で開催され、この演奏を収録した DVD でもビューローに捧げられた音楽祭の様子が紹介されている。ビューローが初演したワーグナーの《ニルンベルクのマイスタージンガー》がエヴァーディングの演出で上演されたり、ビューローが作曲した《歌人の呪い》などの作品も演奏された。なお、旧東独領のマイニンゲン

ンは今は幹線から外れた辺鄙な街で、ドイツ再統一もビューロー再評価の契機となったのであろう。

この1994年に国際ハンス・フォン・ビューロー協会も設立されたが、音楽祭ではシンポジウムも開催され、その記録集も出版された⁽¹⁾。数多くの論文が収められたその記録集が近年のビューロー再評価の出発点となったようだ。というのも、その後、ビューローに関する出版物が急に増え出したからだ。1999年に出版されたハンス＝ヨアヒム・ヒンリクセンの『ハンス・フォン・ビューローの演奏解釈』⁽²⁾は教授資格論文で、ビューローの書き込みのある譜面も紹介され、かなり専門的だが、ビューローが研究対象として定着してきたことを物語る。カールスルーエで音楽監督も務めたことのあるフリトヨフ・ハースは2002年にビューローの評伝を出版した⁽³⁾（ハースは1995年にヘルマン・レーヴィの評伝、2006年にフェーリクス・モットルの評伝も出版しており、ワーグナーの周辺に位置し、これまであまり顧みられることのなかった指揮者を重点的に研究している）。この評伝ではピアニスト、指揮者、人間の3つの側面に分けてビューローの業績が評価されているが、ヴォルフ＝ディーター・ゲヴァンデは、誕生から亡くなるまでのビューローの業績を年代を追って評価する評伝を、2005年1月8日の生誕175年の誕生日に間に合わせるように2004年内に出版した⁽⁴⁾。ゲヴァンデは職業教育について研究する教育学者だが、若い頃からの音楽（特にワーグナー）への情熱からこの評伝を執筆したという。ビューローの誕生から死までを年代順にまとめた一冊の評伝としては戦後初の出版であり、1921年のムラン＝エカルト以降の本格的評伝となる。

2009年、英語では初めてのビューロー評伝がアラン・ウォーカーにより出版された⁽⁵⁾。ウォーカーはリストの3巻からなる大部の評伝を出版しており、その研究の延長

-
- (1) Beiträge zum Kolloquium. Hans von Bülow – Leben, Wirken und Vermächtnis. Zum 100. Todestag Hans von Bülows. Hrsg. von Herta Müller & Verona Gerasch. Südthüringer Forschungen Nr. 28. Meiningen. 1994.
 - (2) Hinrichsen, Hans-Joachim: Musikalische Interpretation. Hans von Bülow. Archiv für Musikwissenschaft. Band 46. Stuttgart. 1999.
 - (3) Haas, Frithjof: Hans von Bülow. Leben und Wirken. Wilhelmshaven. 2002.
 - (4) Gewande, Wolf-Dieter: Hans von Bülow. Eine biographisch-dokumentarische Würdigung aus Anlass seines 175. Geburtstages. Lilienthal. 2004.

上でビューローに興味を持ったという。世の中、続くときは続くもので2011年、リチャルト・シュトラウス研究者として知られるケネス・バーキンも英語のビューロー評伝を出版した⁽⁶⁾。おそらく、ウォーカーと同時期に執筆していて、ウォーカーの後塵を拝したのであろう。本の後半300頁近くを、ビューローの膨大な演奏記録に充てており、資料としても貴重である⁽⁷⁾。いずれにせよ、2002年から2011年までの10年間に4冊もの評伝が一気に出版されたのは、偶然もあるにせよ、ビューローが音楽の歴史において、単なる脇役ではなく、今日の音楽界における先駆的役割を演じたことが改めて再評価されているからではなかろうか。

2. ピアニストとしての演奏旅行を始めるまで

この研究ノートでは、ビューローのイギリス演奏旅行について概観し、ビューローの音楽活動の一端を考察するとともに、ビューローの今日の音楽界における先駆的役割にも着目する。ビューローがピアニストとして大規模な演奏旅行を始めるようになったのは、40歳を過ぎてからである。そこに到るまでの経緯をまず見ておきたい⁽⁸⁾。

経済的に困窮していたワーグナーが1864年5月、バイエルン国王ルートヴィヒ2世からの突然のミュンヘン招聘を受け、ミュンヘンで贅沢な暮らしを始めたことはよく知られている。ビューローはその当時、ベルリンのシュテルン音楽院でピアノ教師をしていたが、ワーグナーからコジマと一緒にミュンヘンに住むように説得された。ワーグナーはその前年の1863年11月、ベルリンのビューロー夫妻を訪問したとき、コジマと馬車で遠乗りに出かけ、愛の黙約を交わしていた。1864年6月29日、コジマは娘のダニエラとブランディーネを連れてビューローより1週間早くミュンヘン郊外シュタルンベルク湖畔のワーグナーの邸宅を訪れた。このときからワーグナーとコジマの関係は決定的なものとなり、7月7日にここを訪れたビューローは、コジマと師ワーグナーとの関係にただ驚くばかりだった。《トリスタンとイゾルデ》の練習が

(5) Walker, Alan: Hans von Bülow. A Life and Time. Oxford. 2009. 邦訳が年内に出版予定。

(6) Birkin, Kenneth: Hans von Bülow. A Life for Music. Cambridge. 2011.

(7) この研究ノートでの演奏会のデータも、この文献に基づいている。

(8) 以下、ビューローの生涯の記述は、主にウォーカーの評伝による。

開始された 1865 年 4 月 10 日、ワーグナーとコジマの最初の子が誕生し、イゾルデと名づけられた。ビューローは芸術と人間とは別物と割り切り、1865 年 6 月 10 日、《トリスタンとイゾルデ》の初演を指揮し、大成功に貢献した。

1865 年 12 月、ミュンヘンの宮廷や市民の間から贅沢三昧の暮らしを送り不倫疑惑もあるワーグナーへの反感が高まり、ミュンヘンからの退去命令が出され、ワーグナーはスイスに赴く。1866 年春、ルツェルン近郊トリープシェンの別荘に移住すると、コジマもまた娘を連れて訪問。ワーグナーは《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の完成に全力を注ぎ、1867 年秋に完成。1868 年 6 月 21 日、またビューローの指揮で初演される。コジマはその後もミュンヘンとトリープシェンの間を行き来し、9 月にはワーグナーと 2 週間のイタリア旅行にも出かけた。そして 11 月 15 日、最終的にビューローのもとを離れる決断を下した。翌 1869 年 1 月 1 日から日記を書き始めたコジマは、1870 年 11 月 15 日の日記に、「2 年前の今日、私はハンスに永遠の別れを告げたのだ⁽⁹⁾」と記している。

ビューローは辞任を申し出た宮廷歌劇場や王立音楽学校での残務を整理するため、しばらくはミュンヘンに残る必要があったが、1869 年 9 月、心の傷を癒すためにイタリアに向けて旅立った。フィレンツェを滞在先に選んだのは、王立音楽学校でのビューローの弟子で、後任のピアノ教師にも就任したジュゼッペ・ブオナミーチの意見によるところも大きいという。10 月から住み始めたフィレンツェでは、ドレスデン時代の幼友達ジェシー・ロソの世話を受けた。ビューローは悪化した健康も次第に回復し、ピアノ演奏で世界演奏旅行に出る意欲も湧き、そのための練習にも熱心に取り組んだ。1870 年 1 月 8 日、40 歳の誕生日を迎えたが、この年の 7 月、ベルリンでの煩雑な手続きを経て、ビューローはコジマとの離婚がやっと認められた。1870 年から 1871 年にかけてはフィレンツェを中心にイタリア国内で演奏活動を続け、1871 年 10 月 22 日、60 歳の誕生日を迎えたりストをローマに訪問してもいる。1872 年 1

(9) Wagner, Cosima: Die Tagebücher. Bd. I. München/Zürich. 1988. S. 313. [『リヒャルト・ワーグナーの妻コジマの日記 2』三光長治、池上純一、池上弘子訳、東海大学出版会、2009 年、230 頁]

(10) ジェシー・ロソは 1850 年、ボルドー在住中にワーグナーと恋愛関係に陥り、駆け落ち寸前までいったが、夫により妨害された女性でもある。

月からビューローはいよいよヨーロッパ演奏旅行に乗り出し、まずヴィーンでコンサートを開催し、大喝采を受けた。その後、ペストでもコンサートをしたあと、ドイツ、ポーランド、スイスの各地で約4ヶ月の演奏旅行を行った。1872年11月から1873年3月にかけて、また約4ヶ月のヨーロッパ演奏旅行に出たビューローは、その勢いのまま4月にイギリスを初訪問。ロンドンを中心に演奏会を開催した。それ以降、ビューローはイギリスで全10回の演奏旅行を行った。その概要は下記の通り。

- 第1回 1873年4月～5月
- 第2回 1873年11月～1874年2月
- 第3回 1874年10月～1875年5月
- 第4回 1878年6月
- 第5回 1878年11月～12月
- 第6回 1879年6月～7月
- 第7回 1880年1月～2月
- 第8回 1880年5月
- 第9回 1884年4月
- 第10回 1888年6月

これ以外に、1877年11月から1878年1月にかけて、グラスゴー合唱連盟の指揮者を務めたが、これはスコットランドに長期滞在しての活動であり、都市を移動して回る演奏旅行とは質が違うので、演奏旅行からは除外している。

3. 初期のイギリス演奏旅行

ビューローのイギリスでの最初の演奏会は1873年4月28日、ロンドンのセント・ジェームズホールで開催された。フィルハーモニック協会のコンサートで、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」を演奏し、大好評を博した。その後、ロンドンで5月5日、7日、9日、10日、13日、22日、23日、26日、27日とコンサートに出演した。5月26日は2回目のフィルハーモニック協会の演奏会で、ルビンシテイ

ンのピアノ協奏曲第3番ト長調を演奏し、休憩時間に開かれたフィルハーモニック協会の臨時の理事会で、協会のゴールド・メダルをビューローに贈ることが決まった。また5月9日のコンサートではワーグナーの作品を指揮し、《トリスタンとイゾルデ》の前奏曲と愛の死の演奏はイギリス初演となった。その後、ブライトン（5月28日）とマンチェスター（5月30日）でのピアノ・リサイタルで第1回のイギリス演奏旅行は終了した。

夏にドイツのバーデンバーデンで静養したビューローは11月、またイギリスを訪れ、第2回のイギリス演奏旅行を行った。外交官ヴィクトル・フォン・ボヤノフスキと結婚したビューローの妹イジドラがちょうどその時期、ロンドン郊外シドナムに転居してきた。ボヤノフスキが総領事として赴任したからであった。ヴィクトルとヴェラという名の幼い子供も一緒に、ビューローはよくここを訪れた。第2回の演奏旅行もベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」の独奏で1873年11月8日に幕を開けたが、今度の演奏会場は水晶宮だった。その後、12月20日までにロンドンを中心にブライトン、マンチェスター、リヴァプール、ブラッドフォード、チェルトナムでリサイタルを開催した。クリスマス休暇の時期にビューローはイギリス演奏旅行を一時中断し、マイニンゲンを訪問した。マイニンゲン公ゲオルク二世と彼の新妻ヘレーネ・フォン・ヘルトブルクに招待されたからだった。ヘレーネはビューローのベルリン時代の教え子で、ビューローをマイニンゲンに招聘したがっていた。ビューローは12月28日、マイニンゲン宮廷楽団を初めて指揮した。彼はこのオーケストラを「非の打ちどころがない」と絶賛したが、当時はピアニストとしての演奏旅行活動に意欲を注いでいたので、マイニンゲン宮廷楽団の音楽監督に就任するのは、7年後の1880年になってからだった。

ビューローは1874年1月12日のロンドンでの公演でイギリス演奏旅行を再開した。今度はスコットランドにも足を伸ばし、グラスゴー（1月24日）、エディンバラ（1月25日）でもリサイタルを開催した。どちらも大好評で、このあと第3回のイギリス演奏旅行でも、何度かスコットランドを訪れることになる。またアイリッシュ海を越え、1月29日にはアイルランドのダブリンでもリサイタルを開催した。

第3回のイギリス演奏旅行は1874年10月から1875年5月までの7ヶ月に及ぶ長

期のものとなった。1月上旬にブリュッセルでピアノ・リサイタルを開催した以外は、ずっとイギリスに滞在した。1874年10月17日から12月上旬にかけてロンドンを中心に20回近いコンサートを開催したあと、ビューローはスコットランドを再訪し、グラスゴー（12月10日）、ダンディー（12月11日）、エディンバラ（12月12日）でピアノ・リサイタルを開催した。しかし、このときのスコットランドでのビューローの活動で重要なのは1875年1月25日、グラスゴーでオーケストラを指揮したことである。1874/1875年のシーズンにスコットランドで初めて50人編成のオーケストラが結成されたが、指揮者のヘンリー・ランベス（1822～1895）が凡庸だったため、定期演奏会の財政は破綻しかけていた。そこにビューローが指揮者として登場したので、圧倒的な大成功を収めた。新聞でも大絶賛されたこのコンサートのプログラムは次の通り。

ヴェーバー	《オイリアンテ》序曲
ベートーヴェン	ピアノ協奏曲第5番変ホ長調「皇帝」作品73
シューマン	交響曲第1番変ロ長調「春」作品38
ワーグナー	《タンホイザー》序曲、忠誠行進曲
リスト	ハンガリー民謡による幻想曲

ベートーヴェンの《皇帝》とリストのハンガリー幻想曲では、ビューローはピアノ独奏を担当し、コヴェントガーデン歌劇場のコンサートマスターでもあったジョン・キャロダスが指揮をした。ビューローは1877/1878年のシーズン、グラスゴー合唱連盟からの依頼で10週間、グラスゴーで音楽監督を務めることになる。

1875年4月、アメリカへ出発する門出にロンドンで開催された「フェアウェル・リサイタル」で、この長期のイギリス演奏旅行は終了した。4月7日の最初の「フェアウェル・リサイタル」は、オール・ショパン・プログラムで、曲の演奏だけで2時間半以上もかかる、今日では考えられないような長大なプログラムだった。

ピアノ・ソナタ第3番ロ短調 作品58

エロールのロマンスによる華麗なる変奏曲 作品 12
夜想曲 作品 37 より第 2 番 (リクエストによる)
バラード第 1 番ト短調 作品 23
前奏曲 作品 28 より第 13 番
即興曲嬰へ長調 作品 36 (リクエストによる)
スケルツォ第 4 番ホ長調 作品 54
3つのワルツ 作品 34
協奏曲のアレグロ 作品 46
3つのマズルカ 作品 59
タランテッラ変イ長調 作品 43
子守歌変ニ長調 作品 57 (リクエストによる)
ポロネーズ変イ長調「英雄」作品 53

このコンサートはほぼ満員で、当時のイギリスの著名な演奏家たちも数多く会場に足を運んだようだ。

4. グラスゴーでの音楽監督

ビューローは 1875 年 10 月にアメリカを初訪問し、1876 年 5 月までのアメリカ演奏旅行を行った。最初の訪問地ボストンではチャイコフスキーのピアノ協奏曲第 1 番を世界初演し、作曲家も驚くほどの好評を博した。半年で 140 回近い演奏会をこなしたビューローはかなり憔悴し、帰国後 1 年以上、演奏活動を行っていない。1877 年 8 月、ビューローはハノーファーで歌劇場の音楽監督になる依頼を受けた。すでに 1877 年 11 月から 1878 年 1 月までの 10 週間、グラスゴー合唱連盟の指揮者を務める先約があったので、その間はグラスゴーに行くという条件でビューローは音楽監督就任を受諾した。

この 1878 年 11 月からのイギリス滞在は演奏旅行ではないが、ビューローのイギリスでの活動を知る上では重要であるので、考察しておきたい。ビューローのグラスゴーでの活動状況は、ウォーカーらイギリス人研究者によってかなり明らかになってき

ている。グラスゴーでは、2,800人収容のセント・アンドリュース・ホール⁽¹¹⁾が建てられた。柿落しは1877年11月13日で、ヘンリー・ランベスの指揮でヘンデルの《メサイア》が演奏された。ビューローの最初の演奏会は11月16日で、オール・ベートーヴェン・プログラムだった。

《献堂式》序曲 作品124

《アテネの廃墟》より行進曲と合唱 作品113

アリエッタ《この暗き墓場に》(独唱, ジャネット・パティ)

交響曲第8番へ長調 作品93

《シュテファン王》序曲 作品117

ロマンス第1番ト長調 作品40 (独奏, ジョン・キャロダス)

《自然における神の栄光》作品48第4曲 (独唱, ジャネット・パティ)

合唱幻想曲 作品80

最後の《合唱幻想曲》では、ビューローが指揮とピアノ独奏の両方を務めた。

グラスゴーでは本格的な作品の演奏会とポピュラーな作品による演奏会の2本立てでプログラミングがなされた。後者のポピュラーコンサートでは、「イギリスの夕べ」、「スコットランドの夕べ」、「ドイツの夕べ」、「民衆の夕べ」、そして「国際人の夕べ」のようなテーマに沿った選曲がなされた。このポピュラーコンサートの演奏曲目は、1882年に再婚したビューローの夫人マリーが(ビューローの死後に)出版した書簡集で紹介されている。例えば、1877年12月1日、グラスゴーで開催された「スコットランドの夕べ」の曲目は次のようなものである。⁽¹²⁾

ゲーゼ：スコットランド序曲《高地にて》

メンデルスゾーン：《スコットランド交響曲》からスケルツォ

(11) このホールは残念なことに、1962年10月26日の火事で全焼した。

(12) Bülow, Hans von: Briefe. V. Band. 1872-1880. Hrsg. von Marie von Bülow. Leipzig. 1904. S. 464-466.

- ベートーヴェン：3つのスコットランドの歌
 マッケンジー：序曲《セルバンテス》
 メンデルスゾーン：《スコットランド交響曲》からフィナーレ
 ボイエルデュー：《白衣の婦人》序曲
 モシェレス：スコットランドの主題による幻想曲
 スコットランド民謡《天国のメアリー》
 マイルス・バーケット・フォスター：《ロブ・ロイ》序曲
 シューマン：《ミルテの花》より「ハイランド地方の人々の別れ」
 ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ《小さい風車》
 ヨハン・シュトラウス：ポルカ《歌手の喜び》
 オベール：《ポルティチの啞娘》序曲

アレグザンダー・マッケンジー（1847～1935）はスコットランド出身で、当時30歳になったばかりの若手作曲家。グラスゴー合唱連盟がなかなか取り上げようとしなかった作品を、ビューローが取り上げた。この序曲《セルバンテス》は作曲家自身に指揮させている。1月5日のラスト・コンサートを、再演して欲しい曲を投票によって決めたプログラムにより行ったあと、ビューローはロンドンに戻り、1878年1月8日、シドナムで妹一家と48歳の誕生日を過ごし、それからハノーファーでの歌劇場の仕事に復帰した。

このグラスゴーのオーケストラは1891年、スコティッシュ管弦楽団として正式に発足し、現在は英国王室の財政的支援も受け、ロイヤル・スコティッシュ管弦楽団として世界的にも知られている。グラスゴーのオーケストラの創成期におけるビューローの果たした功績についても、近年の研究で再評価されている。

5. 中期の演奏旅行

ビューローがグラスゴーからハノーファーに戻った5ヶ月後、1878年4月に4回のリサイタルを開催するためにまたロンドンを訪問した。この第4回イギリス演奏旅行は約2週間の短期の滞りで、コンサートを開催したのもロンドンだけだった。

その後、1878年11月から12月にかけての約3週間の第5回イギリス演奏旅行では、イギリス各地で17回の演奏会を開いた。まずロンドンで11月18日から20日にかけて3回の演奏会を開催したが、11月20日のリサイタルではベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタ5曲を一晩で演奏した。ベートーヴェンの第28番から第32番までのピアノ・ソナタを一晩で演奏することは、演奏時間の面でも今日では考えられないが、ビューローはこの試みをハノーファー時代に構想し、1878年10月23日にベルリンで最初に実行に移した。その後、このイギリス演奏旅行で11月20日にロンドン、11月23日にエディンバラでも開催した。1879年にはブレーメン、ヴュルツブルク、ドレスデン、ライプツィヒ、ベルリン、カッセル、ケルンで開催し、ベートーヴェンの晩年のピアノ・ソナタを一晩で演奏するプロジェクトは、1880年前半までビューローの定番プログラムとして定着する。ビューローのベートーヴェン演奏にかける熱意は、やがて後述するベートーヴェン・ツィクルスに発展していく。

この第5回のイギリス演奏旅行でビューローは、ライプツィヒの「ジグナーレ」誌に紀行文を寄稿した。記事は「霧の中を行く旅の批評手記」と題されているが、イギリスやイギリス音楽界へのビューロー独特の毒舌的な批判に満ちていた。英語に訳されてイギリスの雑誌にも転載されたので、イギリス人の反感を買うことにもなった。産業革命以降、鉄鋼業の中心地となったイングランドの工業都市シェフィールドから1878年12月4日に書き送った原稿は、次のような書き出しで始まっている。

イギリスのトレド、またはゾーリンゲンと呼ばれるこの都市では、太陽は噂でしか知らないと自慢しているようだ。故ウィリアム・スタンデル・ベネットの作曲様式は、この噂で説明できると私はいつも思っていた。彼はシェフィールドの広大な煙雲の中に世界の暗闇を見つけ、色彩の欠如が作曲スケッチの正確さとともに注目される作曲家で、その正確さゆえにミニ・メンデルスゾーン⁽¹³⁾のあだ名が与えられたのは周知の通りだ。

(13) Bülow, Hans von: Ausgewählte Schriften. 1850-1892. Hrsg. von Marie von Bülow. Leipzig. ²1911. 2. Abteilung. S. 191.

ウィリアム・スタンデール・ベネット（1816～1875）はシェフィールドで生まれた作曲家で、3年前にロンドンで亡くなったばかりだった。イギリスの読者は、ビューローのこうした文章にはあまりいい印象は受けなかった。

それでもビューローは、1880年秋にマイニンゲン宮廷楽団の音楽監督に就任するまで、その後3回もイギリスを訪れている。1879年6月から7月までの第6回のイギリス演奏旅行では、ロンドン（6月16日、23日、30日、7月1日）、マルヴァーン（6月18日）、チェルトナム（6月19日）、フォークストン（6月25日）、ヘイスティングス（6月26日）、ブライトン（6月28日）、タンブリッジ・ウェルス（7月3日）でコンサートを開催した。6月21日には、ロンドンのニューフィルハーモニック協会のコンサートでチャイコフスキーピアノ協奏曲第1番のピアノ独奏をする予定だったが、指揮者のヴィルヘルム・ガンツ（1833～1914）があまりにも無能なため、出演をキャンセルしたことで、また物議を醸した。ビューローは「ニューフィルハーモニックはミスハーモニックと呼ぶべきだ⁽¹⁴⁾」と友人宛の手紙に書いている。

第7回のイギリス演奏旅行は1880年1月14日のレスターからスタートし、ロンドン郊外リー（1月15日）、ブラッドフォード（1月16日）、ロンドン（1月17日）、バーミンガム（1月21日）、オックスフォード（1月22日）、トーベイ（1月24日）、ロンドン（1月26日）、タンブリッジ・ウェルス（1月27日）、ロンドン（1月28日）、マンチェスター（1月29日）、エディンバラ（1月31日）、ロンドン（2月2日）、ハル（2月3日）、ケンブリッジ（2月4日）、ロチェスター（2月5日）でピアノ・リサイタルを開催した。

第8回のイギリス演奏旅行は1880年5月11日のロンドンからスタートし、チェルトナム（5月19日）、ロンドン（5月20日）、ブライトン（5月22日）、ロンドン（5月25日）と回り、日程にも余裕があり、移動距離も比較的少ない演奏旅行だった。

1878年春から1880年春にかけての2年間でイギリス演奏旅行を5回も行ったビューローは、1880年秋にマイニンゲン宮廷楽団の楽長に就任すると、このオーケストラとの活動に精力を傾けた。しかしピアニストとしての活動も演奏回数は減ったとは

(14) Bülow, Hans von : Briefe. V. Band. 1872-1880. Hrsg. von Marie von Bülow. Leipzig. 1904. S. 574.

いえ、相変わらず続けており、4年後の1884年春、第9回のイギリス演奏旅行が行われた。4月29日にロンドンでリサイタルをしたあと、ダブリン（4月30日、5月1日）、リヴァプール（5月3日）、ロンドン（5月6日、7日）、タンブリッジ・ウェルス（5月8日）、エディンバラ（5月10日）、マルヴァーン（5月12日）、チェルトナム（5月13日）、ブライトン（5月14日）、ロンドン（5月15日）と移動してリサイタルを開催した。

6. 後期の演奏旅行

ビューローは1885年秋、マイニンゲン宮廷楽団の楽長を辞任する意向を伝え、1886年1月に正式に辞任する。その後はハンブルクに居を構え、1886年秋からハンブルク歌劇場のオーケストラの定期演奏会シリーズを指揮する。さらに1887年秋からはベルリン・フィルの音楽監督にも就任する。イギリスの作曲家の作品も取り上げ、チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード（1852～1924）の交響曲第3番《アイリッシュ》を、1888年1月26日にハンブルクで、2月6日にはベルリン・フィルの定期演奏会でも演奏し、作曲家を感激させた。その1888年の6月、ビューローは10回目の最後のイギリス演奏旅行を行った。

この時期、ビューローはベートーヴェン・ツィクルスのリサイタルに精力を注いでいた。これは1878年から始めた最後の5曲のピアノ・ソナタを一晩で演奏する企画をさらに発展させたもので、ベートーヴェンの主要なピアノ作品を4日かけて演奏した。ライブツィヒ（1886年10月15日、16日、18日、19日）で幕を開け、プレスラウ（1886年11月21日、25日、27日、28日）、ヴィーン（1887年1月21日、24日、2月1日、7日）、ベルリン（1887年3月2日、5日、8日、10日）、ハンブルク（1887年3月24日、28日、29日、30日）、ミュンヘン（1887年4月2日、4日、12日、14日）で開催し、いよいよ1888年6月、ロンドンでも開催されることになった。イギリスでも空前絶後の企画であり、大勢の聴衆が詰めかけ、大評判となったようだ。ビューローのプログラム構成はだいたい決まっていて、ロンドンでも下記のような順でベートーヴェンの作品が演奏された。

第1回 6月4日

ピアノ・ソナタ第2番イ長調 作品2-2

ピアノ・ソナタ第6番へ長調 作品10-2

「森の乙女」のロシア舞曲の主題による12の変奏曲イ長調

ピアノ・ソナタ第8番ハ短調「悲愴」作品13

ピアノ・ソナタ第9番ホ長調 作品14-1

ピアノ・ソナタ第10番ト長調 作品14-2

創作主題による6つの変奏曲へ長調 作品34

ピアノ・ソナタ第15番ニ長調「田園」作品28

第2回 6月12日

ピアノ・ソナタ第13番変ホ長調 作品27-1

ピアノ・ソナタ第14番嬰ハ短調「月光」作品27-2

15の変奏曲とフーガ変ホ長調（エロイカ変奏曲）作品35

ピアノ・ソナタ第17番ニ短調「テンペスト」作品31-2

ピアノ・ソナタ第18番変ホ長調 作品31-3

創作主題による32の変奏曲ハ短調

第3回 6月19日

ピアノ・ソナタ第23番へ短調「熱情」作品57

ピアノ・ソナタ第24番嬰へ長調 作品78

ピアノ・ソナタ第25番変ホ長調「告別」作品81a

幻想曲 作品77

ピアノ・ソナタ第30番ホ長調 作品109

ピアノ・ソナタ第31番変イ長調 作品110

ピアノ・ソナタ第32番ハ短調 作品111

第4回 6月26日

ピアノ・ソナタ第29番変ロ長調「ハンマークラヴィーア」作品106

ディアベッリのワルツの主題による33の変奏曲ハ長調 作品120

ロンド・ア・カプリッチョト長調（失われた小銭への怒り）作品129

このロンドンでのベートーヴェン・ツィクルスでの大成功を受け1889年3月～5月、アメリカでもベートーヴェン・ツィクルスを含めた演奏会を開催するために訪米した。翌1890年3月～5月にもアメリカを再訪した。しかし、1890年5月にアメリカから帰国したビューローの演奏活動は、ほとんどベルリンとハンブルクに限られるようになる。体調も悪化し、もはやハードな演奏旅行に耐えられる状態ではなくなったのだろう。イギリス演奏旅行も一度もなされていない。1890/1891年のシーズンも1891/1892年のシーズンもベルリン・フィルとハンブルクでのそれぞれ10回ずつの定期演奏会を指揮するだけで精一杯だった。1892/1893年のシーズンにベルリン・フィルを指揮できたのは1893年3月13日の第10回定期演奏会と4月10日の楽団の年金基金のための演奏会だけで、これがビューローの生涯最後の演奏会となった。その後、病気の療養に努め、1894年1月末には快癒を期待してカイロに旅立ったものの、カイロ到着直後の1894年2月12日、病室で亡くなった。

この研究ノートでは、ビューローのイギリス演奏旅行を基軸にビューローの生涯についても概観してきたが、ビューローの演奏会におけるプログラミングの工夫など、彼の先駆的な音楽活動は、どれほど高く評価してもし過ぎることはないであろう。ブラームスの作品だけでピアノ・リサイタルを開催したのはビューローが初めてであることも知られているが、ベートーヴェン晩年のピアノ・ソナタを一晩で演奏したり、またベートーヴェンの主要作品を年代順に演奏するベートーヴェン・ツィクルスを始めるなど、筋の通ったプログラムは後世にも大きな影響を与えたのだから。グラスゴーでのオーケストラ演奏会での、何らかのキーワードで選曲されたプログラムなども、我々には有益なモデルとなるであろう。実際、近年のベルリン・フィルの野外コンサートでも、「フランスの夕べ」、「サンクト・ペテルブルクの夕べ」、「狂詩曲の夕べ」など、特定のテーマに沿ったプログラムが組まれている。